

第4話 天孫降臨

そこで天照大神の孫の瓊瓊杵尊は、天皇の位は永遠であるという宝祚無窮の神勅を奉じて、三種の神器を賜わって、豊葦原の瑞穂の国に降られた。日本の国の基はここに定まった。

大国主命がいさぎよく国土を奉還されたことが、次第に全国に伝わって行くと、諸方に割拠している土賊どもは、討伐を受けるまでもなく、次々に建御雷命の威勢に服して、豊葦原の中つ国は間もなくことごとく平定された。

建御雷命が高天原に帰ってこの経過を大神に奏上しますと、大神は非常なお喜びで、厚くその勲功を賞せられ、さて改めて太子の天忍穗耳尊に仰せられた。

「今、豊葦原の中つ国はことごとく平定されたという。就いては、かねて命じたように、降って行って治めなさい」と。

ところが、尊はご自分が降る準備をしている間に生まれた瓊瓊杵尊が、生まれつきに知恵も力もすぐれているから、この子を降したいと申し上げた。そこで、大神にはお孫様にあたる瓊瓊杵尊をお降しすることとなり、次の如く仰せられました。

天孫降臨と大神の神勅

「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是わが子孫の王たるべき地なり。爾皇孫は就いて治らせよ。行け。宝祚の栄えんこと、当に天壤と窮まりなかるべし」と。

これを今日の言葉でいいますと、「日本国はわが子孫の者が天皇となって治めるべき国です。お前は行って治めなさい。天皇の御位の益々栄えることは、まさに天地と共に永遠であろう」となります。この勅りは、要するに、わが日本の国土と皇室とは、その成り立ちから全く分けることの出来ないものであり、この国家は、無窮の未来に向かって常に発展して止まない力を内に持つ、ということをお示しになったのです。

三種の神器

実に、この勅りに依って、万国無比のわが国体は永遠に定まり、天壤無窮の皇運もここに始まって、君臣の別も明らかになり、わが国にとって、この上もなく尊い勅りであります。また、この勅りと同時に、記念として天照大神お手づから三種の宝物を瓊瓊杵尊にお授けになりました。

それは鏡と玉と剣でした。鏡の名は八咫の鏡、玉の名は八坂瓊の勾玉、剣の名は天叢雲の剣（素戔鳴尊からの献上品）です。これがいわゆる三種の神器であります。大神はこの三つの寶をお授けになって、改めて、「この鏡を私と思って大切にしてください」と仰せられた。わが国で、今日までも、神社のご神体を鏡で代表させるのはこの古事に因るのでしょう。

第4話 天 孫 降 臨

しかしながら、数多い宝 物の中から、特にこの三種を選んでお授けになったのには深い仔細があると思われまゝ。 鏡 は常に明らかであり万物の物を照らし、是非善悪の 姿 をそのままに 現 すところが、知恵と同じであります。 玉はその光が和らかで 潤 いがあり、 従 順 なのがその持ち前で、慈悲仁 愛 に相当します。 剣 は決断、勇猛で、ひとたびこれを振れば乱麻も絶つが如く、 快 く 鋭 いのがその持ち前なので、勇であります。

これを観れば、三種の神器はおのづから、智仁勇の三徳を示します。 とりわけ、重きを鏡に置かれたのは、大神が度々姿をお写しになって、魂 をそれにお籠めになった物であつたからでもありません。また、第一の知恵が明らかであれば、第二、第三の慈悲、決断はおのづから起きて来るもの故でもあります。 すなわち、明 鏡 の如くに明らかな態度を以って天下に臨み、先づ玉の如く和らかな慈悲仁愛を以って万民を撫で育てなさい、そして、もしなお帰順しない者があれば、初めて 剣 を以って平らげなさい。

というので、この大神のご神慮は、すなわち代々の天皇がわが国をご統治になる大方針となつています。そしてこの時の記念の宝物、すなわち三種の神器は、代々の天皇が皇位のしるしとして、ご即位の時に必ずお受けとりになることになっています。

さて瓊瓊杵 尊 は大神の 勅 りを 承 わると、大勢の部下を連れて、月日を経て、先づ九州の日向（今の宮崎県）の高千穂の峯にお降りになり、それから笠砂の御崎という 処 に御殿をお 奠 めになりました。これを天孫降臨といひましたのは、天 照 大 神 は天の太陽の神と崇められた方で、その子孫がお降りになったからであります。

瓊瓊杵尊とその 后 の木花咲耶姫のお子を彦火火出見 尊 と言ひ、そのお子を鸕鷀草葺不合 尊 といつて、相次いで九州地方を領地としておいでになりました。

うみさち ひこ やまさち ひこ
海幸彦と山幸彦

海幸、山幸の話として名高い物語は、彦火火出見 尊 がその兄の火欄降 命 と領地を 争 われた頃の事を伝えたもので、彦火火出見 尊 はその山幸彦であり、兄の火欄降 命 が海幸彦なのです。

それは、皆さんはお伽 噺 など知っていることでしょうか、今は省きますが、この 噺 の中で、山幸彦の彦火火出見 尊 が失くした釣り針を探しに行った海神の国というのは、普通には海の底の 竜 宮 かのようには言われていますが、実は、そのころ、北九州に大きな勢力を振るって、今の博多から 朝鮮 などへの渡海を監視していた国、すなわち渡津見の国であつたろうといひます。

尊 はその海神の宮で、天孫の御子として非常に 鄭 重 に歓待されて、わたつみの神の 娘 の 豊 玉 姫 を 后 としました。 その地に三年ほど滞在された後に、わたつみの神から餞別に贈られた塩満珠、塩干珠の二つの宝物を持って、笠砂の宮にお帰りになった。

うがやふきあえず のみこと とよたま う み こ
鸕鷀草葺不合 尊 はこの豊玉姫のお産みした御子であります。



うみさちひこ と やまさちひこ
海幸彦 と 山幸彦

うがやふきあえず のみこと
鸕鷀草葺不合尊 の次にお立ちになったのは御子の神倭磐余彦 尊 です。 のち じんこう じんむ
後の人皇第一代神武
てんのう
天皇となられた方で、わが日本国の有様もこの天皇の御代からすっかり 改まったので、この天皇以後は
じんこう よ
人皇の代とって、これまでの御代の神代と区別しています。

いざなぎ
伊弉諾尊

いざなみ
伊弉冉尊

あまてらすおおみかみ 天照大神 - あめのおしほみ 天忍穗耳尊 - ににぎ 瓊瓊杵尊 - ひこほろでみ 彦火火出見尊 - うがやふきあえず 鸕鷀草葺不合尊 - じんむ 神武天皇

すさのうを 素戔嗚尊 - おおくにぬし 大国主命

第4話 天 孫 降 臨

(第4話 てんそんこうりん 天孫降臨 終わり。 次は前頁に戻り、 第5話 じんむてんのう 神武天皇の東征 とうせい へ)